

会長講演

病気を診ずして病人を診よー発想の転換をー

東京慈恵会医科大学教授 寺 島 芳 輝

“病気を診ずして病人を診よ”とは私共慈恵医大の建学の精神としての標語である。明治14年(1881年)、慈恵医大は高木兼寛により、創立されたが、彼は日頃の診療のあり方として“人間としての病気を診る”ことを説き、指導してきた結果、前記の標語が建学の精神になった。この精神はヒポクラテスの誓、ヘルシンキ宣言や現在のInformed Consent などにも相通ずるものがあり、100年以上経た現在でも生き続けていると考え、会長講演のテーマに引用した。

周知のように、平成4年度の出生数が約120万9,000人、合計特殊出生率も1.50と、共に過去最低を記録した。そのうえ、産婦人科を志望する医師の少ないことなどが重なり、将来を考慮し、その活性化をはかるため、本年度、日産婦理事会内に“学会のあり方検討委員会”(水口弘司委員長)が設置された。したがって、この講演が本委員会の活動などになんらかの参考になればと願っている。

産婦人科領域の現状を分析すれば、現在の医学、医療を含めた社会機構と深く係わりあっていることはいままでもなく、産婦人科の活性化をはかるうえでは、現状の認識と共に、今後予測される社会ならびに医学、医療情勢を検討することが必須であると考えている。

戦後、全くの“無”から、国民が営々と働き、45年以上経た現在、私共が、“rich”な感覚を自覚できないにせよ、世界有数の経済大国になったことは事実である。その間、時間的、経済的にも“無駄を省く”ことと、歴史的背景から、自由主義社会にもかかわらず、中央による規制と補助金、生産者優先による、均一、大量生産の結果、今日に至ったといえる。また、昭和23年に始まった国民

皆保険による医療も例外ではない。平等、公平の基本理念のもと均一医療の結果、“人生80年”の世界一長寿社会を築き上げたともいえる。この我が国の現状を、司馬遼太郎氏がいみじくも適切に捕らえているので引用する。“いまの社会の特性を列挙すると、行政管理の精度は高いが、平面的な均一性、また文化の均一性、…中略…価値の多様状況こそ独創性のある思考や社会の活性を生むと思われるのに、逆の均一性への方向にのみ走りつづけているというばかばかしさ。これが戦後社会が到達した光景というなら、日本はやがて衰弱するのではないか”と鋭い警句を発している。

今後予測される社会ならびに医学、医療情勢としては、①高齢化社会＝少子化社会、②高度情報化時代、③ボーダーレス時代、④医師過剰時代、⑤ Cure より Care の時代などを主として列举できるが、昨年、医療法が改正され、病院の機能分化など新しい理念のもと、新医療制度が築かれようとしている。これからは価値観や行動にも変化が生じ、時代の要請を読む力が必要となり、予期せぬ時代が訪れるかも知れない。一般社会では55年体制(冷戦構造)が崩壊し、新しい体制が求められているけれども、私共の領域でも新しい医学、医療の理念が早急に確立されなければならない。確かに、最近の生殖医学の進歩はめざましいが、先端医療技術は社会との対話が必要になってくることが多い。新しい時代を作る科学思想は必要であるが、遠藤周作氏が“科学の進歩は遺伝子を発見し、ついに人間を遺伝子レベルまで細分化してしまったが、それは決して人間に幸福だけをもたらしたわけではない”と述べているけれども、私共はこのことも常に忘れてはならない。